

## 空中写真を用いた戦前期沖縄における製糖工場と社宅の配置図の復元

正会員○辻原万規彦\*1 同 今村仁美\*2

### 9. 建築歴史・意匠-2. 日本近代建築史 建築歴史・意匠

沖縄製糖, 西原, 嘉手納, 高嶺, 宮古

#### 1. はじめに

筆者らは、戦前期に日本の影響下にあった地域を対象として、製糖工場と社宅街の建設とその影響に関する研究を継続している。これまでに、樺太<sup>1)</sup>と北海道<sup>2)</sup>における製糖工場と社宅街の復元図を作成し、台湾の44カ所の製糖工場と社宅街の現況<sup>3)</sup>も報告した。

戦前期の沖縄県で比較的長期間に亘って操業を続けた製糖工場としては、沖縄製糖による沖縄本島の西原、嘉手納ならびに高嶺の3工場と宮古島の宮古工場、大日本製糖による南大東島の大東製糖所がある。このうち大東製糖所については既に報告した<sup>4)</sup>。そこで、本報では、沖縄製糖による4工場を対象として、工場と社宅の配置図の復元について報告する。沖縄製糖の経営内容については澁谷の報告<sup>5)</sup>が、製糖業と密接な関係にあった県営鉄道については金城の文献<sup>6)</sup>がある。

なお、当時の用語や呼称はそのまま用い、引用文などは原則として現代仮名遣いに改めた。

#### 2. 用いた史料の概要

沖縄県公文書館には、主に米国国立公文書館で収集された米軍撮影による空中写真が数多く所蔵されており、2012年3月7日と2013年5月11日に、各工場が写り込んでいる空中写真を入手した。また、沖縄戦の際と占領初期に米軍が撮影した写真も収集されて数多く所蔵されている。これらについても入手した。

また、2009年3月～2013年5月にかけて、断続的に沖縄県立図書館、西原町立図書館、宮古島市立平良図書館、浦添市立図書館、北谷町立図書館ならびに道の駅かでななどを訪問し、文献や史料、写真などを収集した。また、2012年3月8日に高嶺と西原で、同9日に嘉手納で、2013年5月9日に宮古で現地調査を行い、沖縄製糖<sup>7)</sup> 宮古工場では聞き取り調査も行った。

#### 3. 沖縄製糖の概要<sup>8)</sup>

戦前期の沖縄における製糖会社の変遷は複雑で、沖

縄製糖の名称だけでも3度会社が設立された。西原と嘉手納の両工場を有した沖縄製糖(明治43(1910)年設立)は、のちに沖台拓殖製糖となり豊見城工場を新設したが、台南製糖に合併された。一方、高嶺と宜野湾の両工場を有した沖縄製糖(大正5(1916)年設立)も、のちに台南製糖に合併された。さらに、台南製糖は、大正8(1919)年に東洋製糖から宮古工場の設置権を譲渡されたが、経営は思わしくなく、台湾の工場(昭和製糖を設立)と沖縄の工場を分離して別会社とした後、昭和8(1933)年に沖縄製糖と改称した。

工場に着目すると、大正4(1915)年に設立された豊見城工場(沖台拓殖製糖)は昭和4(1929)年9月に宮古工場に合併され、大正6(1917)年に設立された宜野湾工場(沖縄製糖)は大正11(1922)年4月に嘉手納工場に合併された。したがって、明治・大正期に設立され、終戦直前まで操業を続けた工場は、西原(公称能力250t)、嘉手納(同300t)、高嶺(同400t)、宮古(同500t)の4工場であった<sup>9)</sup>(図1)。

#### 4. 各工場と社宅の配置図の復元

図2～図5に、各製糖工場と社宅の復元配置図を示す。復元に用いた空中写真や史料などのほか留意事項についても図中に示した。

##### (1) 西原工場<sup>10)</sup>(図2参照)

西原では、明治42(1909)年1月に、沖縄県臨時糖業改良事務局による1日100tの処理能力を持った工場が操業を始めた。その後、この工場は民間に払い下げられ、さらに、沖台拓殖製糖によって大正6(1917)年3月には250tの新工場が建設された。

西原に糖業改良事務局を設置した理由については今のところ把握できていないが、当時から甘蔗の栽培が盛んな地区であった。工場用水は、敷地内に3カ所設けられたため池によったものと考えられる。工場、社宅ともに周囲の地形は平坦である。職工の多くは工

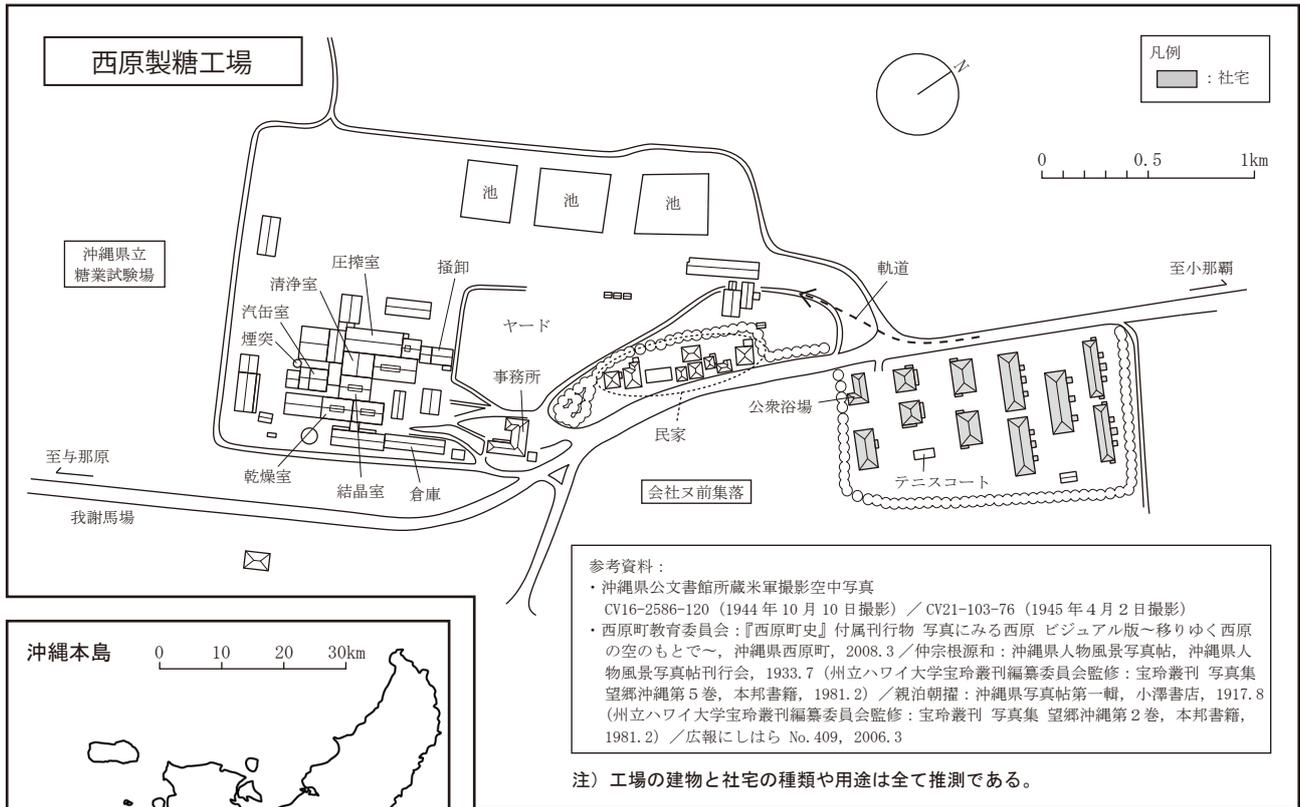


図2 西原工場の建物配置図(復元, 昭和19年頃)

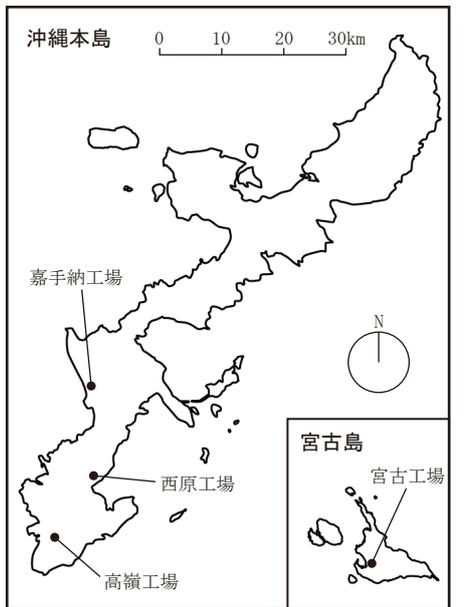


図1 戦前期の沖縄製糖の工場位置



図3 宮古工場の建物配置図(復元, 昭和20年頃)

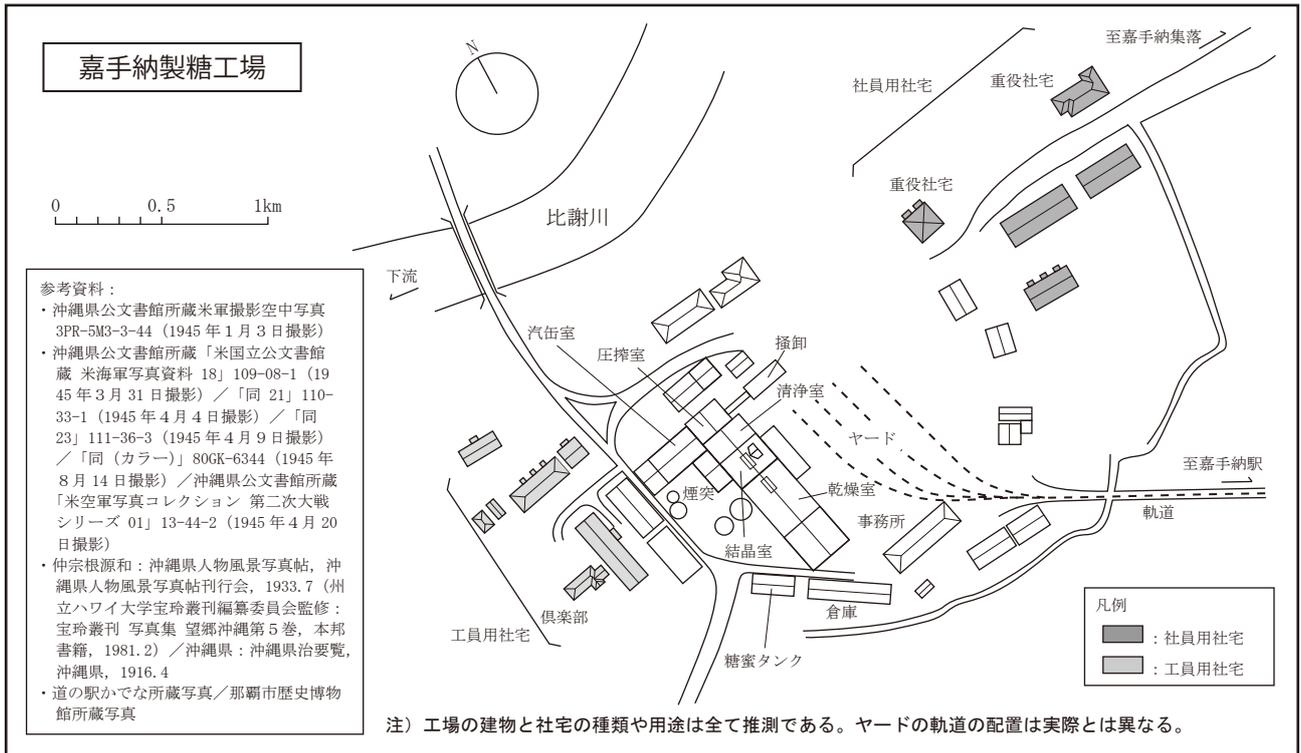


図4 嘉手納工場の建物配置図 (復元, 昭和20年頃)



図5 高嶺工場の建物配置図 (復元, 昭和20年頃)

場付近の集落の若者であったため、職工の社宅よりも主に技師・工手用の社宅が準備されたと考えられる。

戦後の空中写真からは、戦前期の製糖工場と社宅はほぼ全て取り壊されたことが確認でき、現地調査でも工場や社宅の遺構は確認できなかった。工場と社宅があった場所は、現在は、共に主に住宅地となっている。

## (2) 宮古工場<sup>11)</sup> (図3参照)

大正12(1923)年2月より250t工場として操業を開始<sup>12)</sup>、昭和4(1929)年12月には豊見城工場から工場建物や機械設備を移転して公称能力500tに増設した。昭和13(1938)年頃の従業員は、工務係、農務係ならびに総務係を合計して、製糖期には職員31名、現業員265名、原料委員56名、運搬人270名、其他請負人5名の合計627名であり、非製糖期には168名であった。

工場の立地には、崎田川の存在が関係していたとの指摘がある<sup>13)</sup>。社宅は小高い丘で2地区に隔てられており、沖縄本島の3工場の社宅よりは棟数が多い。

現地調査では、工場や社宅の遺構は確認できなかったが、戦前期の工場と同じ位置に沖縄製糖宮古工場が立地している。社宅があった場所は畑になっている。

島の南側に張り巡らされた甘蔗運搬のための軌道の配置図(『宮古島図』, 23,000分の1)を沖縄県公文書館で確認した。城辺の集落まで伸びる城辺本線を中心に数多くの枝線が確認できた。凡例に「軌道既設線」とあるが、実際の配置か否かは確認できていない。

## (3) 嘉手納工場<sup>14)</sup> (図4参照)

明治44(1911)年に竣工し、翌年1月から操業した。

工場の東北には、初期の頃に製品の運搬を担った比謝川があり、南西には嘉手納の平地が広がっていた。職工は周囲の集落から通っていたため、宮古に比べると社宅の棟数も少なく、比較的古くに建設されたためか、社宅の並びも高嶺ほどは整然としていない。

戦後の空中写真からは、戦前期の製糖工場と社宅はほぼ全て取り壊されたことが確認でき、現地調査でも工場や社宅の遺構は確認できなかった。工場と社宅があった場所は、現在は、共に主に住宅地となっている。

## (4) 高嶺工場<sup>15)</sup> (図5参照)

大正6(1917)年2月に建設され、翌年には製糖を開始した。工場の操業にあたっては、工場南に隣接す

る与座集落の与座泉水(ヨザガー)の湧水を利用した。

社宅は工場を見下ろす高台にあった。社宅とそこで生活は、文献16)に詳しく、「周囲の農村と比べてとても豊かな暮らしぶりであった」。

工場の敷地は、戦後に住宅地となり、その後、沖縄製糖から各家に売却された。この敷地の中では、現地調査で、製糖工場の正門と糖蜜タンクの現存が確認できた。一方、戦前期に社宅があった場所には、現在でも住宅が並んでいる。これら両方で、現在は、下与座という新しい集落を形成している。

## 5. まとめ

本報では、沖縄県内で、明治・大正期から終戦直前まで操業を続けた沖縄製糖の西原、嘉手納、高嶺ならびに宮古の各製糖工場と社宅の復元配置図の作成と現状について報告した。

謝辞 調査の際には、次の方々にお世話になった(肩書きはいずれも当時)。西原町立図書館 館長 宮城保氏、同係長 屋宜和子氏、同 金城裕子氏、同 城間義勝氏、沖縄製糖 専務取締役工場長 砂川玄悠氏、同 総務部総務課長 山内博之氏。記して謝意を表す。また、本稿は、本稿は、JSPS 科研費 20760430、23560769、26420647、23360273の助成による成果の一部である。

### 注・参考文献・引用文献

- 1) 辻原, 角, 今村: 旧樺太製糖株式会社豊原工場に関連する建築物の図面と現況にみる特徴-旧明治製糖株式会社社別工場との比較を通じて-, 日本建築学会技術報告集, 6ページ(2014.10.1採用決定)
- 2) 辻原, 角, 今村, 安浪: 戦前期における北海道の製糖工場の社宅街について, 日本建築学会九州支部研究報告, 第49号・3, pp.485~488, 2010.3
- 3) 辻原, 今村, 角: 台湾における戦前期の製糖工場と社宅街の概要, 日本建築学会九州支部研究報告, 第52号・3, pp.553~556, 2013.3
- 4) 辻原, 今村, 安浪: 旧大日本製糖大東製糖所と北大東出張所の社宅街について, 日本建築学会九州支部研究報告, 第48号・3, pp.693~696, 2009.3
- 5) 澁谷義夫: 近代沖縄における分密糖工業の展開-沖縄製糖会社の研究-, 南九州大学園芸学部研究報告, 人文社会科学編, 第30号, pp.7~16, 2000.4
- 6) 金城功: ケーピンの跡を歩く, ひるぎ社, 1997.10
- 7) 現在の沖縄製糖は、戦前期の沖縄製糖とは別会社。
- 8) 沖縄製糖: 沖縄製糖株式会社要覧, 沖縄製糖, 1932頃か(沖縄県立図書館所蔵)。渡邊賢三: 近代砂糖論叢, 渡邊賢三, 1958.8。沖縄県編: 沖縄県史第3巻各論編2 経済, 沖縄県, 1973.4。金城功: 近代沖縄の糖業, ひるぎ社, 1985.11など。
- 9) 『沖縄製糖株式会社の財産調査に関する報告書』(渡邊賢三, 1951.9(沖縄県立図書館所蔵))によれば、製糖工場以外にも、各工場付属の農場などがあったほか、那覇には本店、社宅ならびに倶楽部があった。
- 10) 西原町史編集委員会編: 西原町史 第7巻資料編6 西原の産業, 西原町教育委員会, 2003.3
- 11) 沖縄製糖宮古工場: 創立二十周年記念 宮古噫!! 宮古, 沖縄製糖宮古工場, 1939頃か(沖縄県立図書館所蔵)
- 12) 「戦前の沖縄製糖株式会社宮古工場」(上地洋子, 宮古郷土史研究会会報, No.121, p.3, 2000.11)や『平良市史 第十巻資料編9 戦前新聞集成下』(平良市史編さん委員会編, 平良市教育委員会, 2005.9)などでは、大正7(1918)年には、既に工場が竣工していたとされている。
- 13) 遠藤庄治編: 下地町の民話, 下地町教育委員会, 2003.5
- 14) 嘉手納町史編集委員会編: 嘉手納町史 資料編2 民俗資料, 嘉手納町役場, 1990.3
- 15) 糸満市史編集委員会編: 糸満市史 資料編13 村落資料-旧高嶺村編-, 2013.3
- 16) 真喜志康二編: 高嶺製糖工場の思い出, 南友会, 2002.3

\*1: 熊本県立大学環境共生学部 准教授・博士(工学)

\*2: アトリエ イマージュ

Assoc. Prof., Prefectural University of Kumamoto, Dr. Eng.

Atelier Image